東海支部報

日本山岳会東海支部

No. 147　Oct.　1. 2016

発行　公益社団法人
日本山岳会東海支部
〒460-0014名古屋市中区富士見町8-8 OMCビビビ
電話：052-332-8363　FAX：052-322-7924
郵便口座 00800-5-13749「日本山岳会東海支部」
銀行口座 三菱東京UFJ銀行 覚王山支店
普通1222073「日本山岳会東海支部」
編集　星　一男
印刷　㈱ 浅井隆文社

第10回日中韓学生登山交流会

目　次

○第10回日中韓学生登山交流会　澤井丈典　2

○技術向上委員会
　第1回、第2回講演会報告　片岡康彦　4

○東海支部の山の日2016イベント　佐野忠則　5

○同好会コーナー　山中光子　5

○リレーエッセイ⑥　尾上　昇　6
　マカルー遠征余聞 －その4－

○支部友コーナー　田中　進　10

○上高地の常さん　大口瑛司　11

○東海支部の蔵書からの一冊⑨　石田文男　13

○東海岳人列伝(4)　西山秀夫　16

○委員会報告　東海Youth　山田明美　19
　ボランティア　前田隆久
　亀の会　加藤守彦　20
　自然保護　井藤恵美子　21

○会務報告　毛利邦男　22

○ルーム日誌・会員異動　毛利邦男　24

○INFORMATION　25

○編集後記　星　一男

http://www. jac-tokai. jp　E-mail room01@jac-tokai.jp　E-mail room01@muse.ocn. ne. jp

第10回日中韓学生登山交流会

東海学生山岳連盟　**澤井丈典**

1、概要

・開催期間：2016年8月12日(金)～19日(金)
・開催場所：国立登山研修所、立山雄山
　　及び東京
・参加者数：
　日本側　学生8名、ｽﾀｯﾌ5名、ｶﾞｲﾄﾞ1名
　　(東海支部の学生2名は13日より合流)
　韓国側　学生10名、ｽﾀｯﾌ3名
　中国側　学生8名、ｽﾀｯﾌ6名

2、活動内容

◇1日目

15時富山の国立登山研修所集合、各国参加者の挨拶、プレゼント交換や今後の予定の確認といった内容のオリエンテーションをした。

初めて会った韓国、中国の参加者は皆緊張しているのか、もしくは自分が緊張しているのか、緊張感が漂っていたように感じた。間違いなく自分の中に緊張感はあった。

◇2日目

6時起床、7時よりFirst Aidについての講習及び実習。昼食を挟み13時よりセルフレスキューについての研修と実習を行った。

加藤ガイドのファーストエイド講習

この日から班わけされて日中韓混成チームでの行動となった。これにより今までは日中韓のチーム同士での交流だったが、一気に個人同士の交流へと移ったと感じた。

◇3日目

6時起床、7時よりロープワーク、登攀装備についての研修、実習をした。そして、10時30分より立山カルデラ砂防博物館の見学をした。昼食を挟み13時から登攀の実習及びコンペを行った。

ここでも混成チームでの行動だった。お互いに応援し合う中でさらに結束が強まった。クライミングは国が違ってもすることは同じで皆が共通事項を見つけられたと思う。自由時間もあり、ロープワークについて拙い英語で教えあったり、クライミングウォールを使ってセッションをしたりした。皆の空気が一体になりとても素晴らしい時間だった。

各国のクライミング技術を交換

◇4日目

5時起床、7時に研修所を出発し、室堂へと向かった。8時30分に室堂に到着し１時間の高度順応を行った。中韓の装備が不十分だったため、予定を変更し、室堂～一乗越～雄山へ登頂し、同ルート下降で雷鳥荘へと向かった。立山の雄大な山容を全てのメンバーが楽しむことができた。このころから食事の時も意識せずとも国籍が混ざるようになってきた。

◇5日目

5時30分起床、6時45分出発で室堂へと向かった。バスやケーブルカーを乗り継ぎ、扇沢へ。10時40分に扇沢からバスへ乗り込み東京へ向かった。夕食は中華料理屋にて楽しく行った。

この日で加藤ガイドは別れ、研修は終了した。今後は観光になるのだが、同時に自分たちに残されたこの日中韓交流登山という空間は残りわずかなのだと考え始めた。

◇6日目

7時起床、8時半にバスはホテルを出発し東京スカイツリーへと向かった。東京スカイツリーの後は班ごとに解散し、班ごとに行きたい観光地へと向かった。私の班は浅草寺に向

かった後、新宿へ向かい登山用品店や薬局などでショッピングを楽しんだ。その後、お好み焼き屋でお別れ会を行った。

お別れ会はとても盛り上がりを見せ、各国の歌や言葉、英語が混じり合い、皆が明日で別れることになることを惜しんだ。

お別れ会の様子

◇7日目

7時起床。韓国側と中国側の利用空港が成田と羽田で違うため日本側は2隊に分かれて見送りをした。皆がそれぞれ深い交流の中でいろいろなことがあったようで、とても感動的な別れとなった。

3、総括

今回私が日中韓交流登山に参加させていただき、得られたことは以下である。

○日本語が通じなくとも、深く分かり合える。
○国が違うからといって感じることが違うわけではない。
○文化の違いを楽しむことができる。
○もっと英語を学びたいと感じることができた。
○このような経験を後輩にもさせてあげたいと思った。

言葉が違うというマイナス要因はとても小さいもので、簡単な英語を使ってコミュニケーションをとることはできる。さらに簡単な英語でもお互いに同じ経験をしていれば、感じることは似ていて、深く分かり合えるということ。そして、そのマイナスは視覚障がいや聴覚障がいと比べたらとても小さいことで、一番大切なことはお互いに分かり合おうとする強いエネルギーがあるかであることがわかった。今回初参加であったが、日中韓交流登山には三国の間に強く分かり合おうという強いエネルギーを感じた。今回の交流で、日本人と日本語で会話するよりもはるかに深いつながりを得ることができた。

つまり、私が普段日本語でしている会話というものは言葉に頼りすぎていて、お互いに分かり合おうという気持ちが不足しているのではないであろうか。

このことを学べたことは今後の私の人生において大きな意味があると思うし、改めてこのような行事を企画、実行していただき、なおかつ私を参加させてくれた日本山岳会に感謝したい。ありがとうございました。

第 8 回森の音楽祭 2016 開催のご案内

今年も猿投の森でオーケストラのコンサートを開催します！
コンサートの後は、自然観察会、猿投山ハイキングと森に親しむ一日です。

日　時：10 月 22 日(土)10：30～15：30
場　所：猿投の森特設会場（雨天の場合は
　　コンサートのみ瀬戸蔵つばきホール）
集　合：名鉄瀬戸線尾張瀬戸駅前
　7 時 30 分から 8 時 30 分まで順次シャトルバスにて
　会場近くまで送迎します。
　バス降車後約 2 キロ林道を歩き、会場まで行きます。
参加費：500 円

昨年の演奏風景

第 1 部：10：30～10：45　アルプホルン演奏
　　11：00～12：00　東海学園交響楽団による演奏と市民の合唱。
　　曲目：ベートーヴェン　交響曲第 9 番　ニ短調作品 125（合唱付き）
　　参加者全員で「雪山讃歌」を合唱し終了。
第 2 部：13：00～15：00　森の観察会（定員 150 名）
　　12：30～15：30　猿投山山頂を目指したハイキング（定員 60 名）
詳細は同封したチラシをご覧ください。　　森の音楽祭実行委員会

技術向上委員会講演会報告
第１回成瀬陽一氏、第２回三浦 裕氏の講演

技術向上委員会委員長　**片岡康彦**

「技術向上委員会」は2016年の総会で新たに東海支部の組織表に登場したホヤホヤの委員会です。山の日が制定され、山に親しむ登山者は増大し山は活況を呈してますが、近年東海支部員が事故に遭遇し、楽しいはずの登山が一変して悲しい山になった事例も見受けます。

本で読んだり、見聞きしたりした知識が、予期できない事故発生に全て対応できるかは別問題です。登山者が生きた知識として自分の登山技術の向上を図るよう取り込むことが大切です。

委員会の目的として「安全は全てに優先する」「Safty　First」を掲げ、そのために登山に係る技術の向上を図る。チームワークを意識する。自分の立ち位置を把握し安全を確保して登山を楽む。そのような登山活動の側面的支援をするための安全啓蒙、技術向上を推進していきます。

成瀬陽一氏講演会

１．テーマ：「俺は沢ヤだ」
　　～沢登りの地平を拓く　技術と安全～
２．日　時：平成28年6月18日（土）
　　午後4時～午後6時
３．会　場：東海支部ルーム

支部員、支部友会員を中心に40名ほどの参加者がありました。最近帰国されたばかりのタヒチ島での沢登り速報では、火山島特有の大滝群との出会いや蚊の大群に苦労されたという話に興味を引かれました。

次に、氏の沢登りとの出会いに始まり、今までの沢登りで遭遇した様々なリスク経験などについて話されました。その中で日本の代表的な美しき渓谷群の紹介は、これから沢登りをしてみようという若い人たちにとって興味をそそられる話でした。

最後に、数年前にＮＨＫテレビでも放映された日本でも屈指の困難な谷と言われる称名滝と称名廊下の探査をした時の苦労話などをされ、参加者からのいろいろな質問に答えられていました。

氏の日本の美しき沢に対する深い愛情や、未知のものへの飽くなき探求心などが感じられた有意義な講演会でした。

三浦 裕氏講演会

１．テーマ：山で役立つ知識と事故対応
２．日　時：平成28年7月2日（土）
　　午後4時～午後5時30分
３．会　場：東海支部ルーム

山行には、必ずトラブルはあり、ちょっとした事象が山中では重大事態になってしまいます。これらに素早く対応することが、事故を未然に防ぐ近道と考え、今回専門家のお話を聞くこととなりました。

今回の講師は、名古屋市立大学大学院医学研究科准教授三浦裕先生です。先生は分子生物学がご専門で、一方、自らも国際認定山岳医を目指されているそうです。また、名市大の蝶ヶ岳診療所の創立者でもあります。

今回のテーマは「高山病」でした。最初に先生ご自身が過去に遭遇された死亡事故の事例を示され、高山病がいかに危険であるかについてお話を聞きました。また、分子生物学の視点から、低酸素状態になったときの細胞内ミトコンドリアの無酸素解糖系の代謝システム、血中ヘモグロビンの酸素結合度が体温により違うこと、更には副産物のプロリンによる美容効果のお話まで、高度な内容を、わかりやすく説明していただきました。今後へ役立てたいと思います。

当日は各委員会から約40名の参加がありました。今後この分野の実技講習も併せて開催したいと考えております。冷めないうちに、次の展開を検討いたします。

東海支部の「山の日 2016」イベント

山の日事業本部　**佐野忠則**

初めての「山の日」報告

ご存知のように8月11日が国民の祝日「山の日」として制定され、本年はその最初の年になります。「山の日」の趣旨は《山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する日》となっています。そのため、8月11日には東海支部になじみのある御在所山頂において、山の日の周知活動を行いました。当日は御在所ロープウェイ会社も山の日の記念イベントを山頂広場で実施し、地元の「FMよっかいち」もサテライトスタジオを設置するなど、一体となって大勢の登山者に「山の日」をアピールしました。

抽選会の様子

東海支部のコーナーでは山の日に関係するチラシ配布に合わせて駅前アルプスからの提

好評のイベント

供品の抽選会を実施したところ長蛇の列となり好評でした。また「FMよっかいち」のサテライトスタジオでは高橋支部長に飛び入り参加の声が掛かり電波を通じて「山の日」のPRをすることが出来ました。

このイベントは当初は地元の三重県山岳連盟と連携して実施する計画でしたが、急遽三重県警察本部から三井アウトレットパークジャズドリーム長島で「山の日」に合わせて山岳遭難防止のキャンペーンをやりたいとの要請があり、そちらは三重県岳連が担当することになりました。ただ、急な要請でしたので、配布する資料、展示パネル、ノボリ旗等はすべて東海支部で用意することとし、こちらも好評のうちに終えることが出来ました。

会員の広場

同好会紹介コーナー

東海支部員が有意義なクラブライフを享受するための組織として活動する同好会の活動を紹介するコーナーです。

古道塩の道同好会　　山中光子

8月11日(木)初めての「山の日」、古道塩の道同好会では、以前歩き通しているが「山の日」のイベントとして、再度、愛知県稲武から県境を越える、旧中馬街道の杣路峠を歩いた。稲武野入に最近整備された、大きな岩壁の中の役行者像を川沿いに眺め、杣路峠入口から歩き始める。旧中馬街道、杣路峠と大きな看板が出ている所から登り始める。

登りは森の中の道なので、陽ざしはさえぎら

杣路峠にて

れ快適に歩きだす。この地にも時々イベントが

開催され大勢で歩くようだが、この日は私達だけの静かな峠越え。

この細い山道を、武田信玄が武田勝頼を連れ二万五千の兵を引き連れ通った。

また塩等運んでいる馬方達は、この峠は山賊が多かったので、声を掛け合い連れ立って歩いたと言う。緑が多く傾斜が少ない道でも、荷物を運ぶ馬にとっては過酷な労働で、馬の水飲み場跡もある。馬方にとっては当たり前ながら、各所で馬を大事にする水飲み場や、不幸にも命を落とした馬のための馬頭観音の多い事を旧街道を今まで歩き通して改めて感じた。

杣路峠を歩きながら、コアジサイやマムシグサ、ヤブレガサ、名前のわからない草花に目を取られ歩くうちに、愛知県と長野県の県境に到着。これより信濃路との看板。根羽村に入る。

看板を過ぎしばらく歩くと、尹良(ユキヨシ)神社があらわれる。

尹良親王は後醍醐天皇の孫にあたる親王で足助や稲武にも、古道塩の道を歩くにあたり縁の深い親王。昔この地を訪れた時、水を所望され近くの老婆がここのブナの根元の水を差しだしたところ、美味と何度も飲まれ、お付の者にも飲ませたと云う。今はここのブナの根元の水は枯れてしまっている。神社には水神様や山の神の石像もあった。

神社を超えると、杣路峠となり、根羽村に車を置き登って来た人々と合流。

休憩していると、林の中で白いカモシカがパイプのようなものに突き刺さり死んでいた。

峠からは根羽の村をめざし下山。途中村の方のお話しでは、ブナの水は2～3日前に神社の掃除に行った時は、水があったと言われた。村で神社を守っているので綺麗に神社が保たれていると実感。

以前国道沿いの杣路峠入口(根羽側)大曽礼に大きな案内看板が建った事に喜んでいたが、大曽礼から峠に向かう要所、要所に案内看板が建ち、林道が色々できてしまっているが、看板により道に迷う事は無くなるだろう。

村の教育委員会の方に何度も何度も色々なお話しを伺ったので、業を煮やし建ててくれたものと思う。この峠に興味を持つ人の役にたつのでは。猛暑の中で、標高も800メートル位で暑さを心配したが、皆さんが元気に峠越えを満喫してくれた。

会員の広場

リレーエッセイ⑥

マカルー遠征余聞　その４

常任評議員　**尾上　昇**

キャラバン　～ポーターの足～

ポーターは、中には、草履や靴履きの者もいるが、ほとんどが裸足である。裸足で歩く足の裏はまるで革靴の底のように固い。とはいっても30kgもの荷を背負って岩のでこぼこ道を歩くのである。時には、足を岩角にぶつけたりして怪我もする。

キャラバン中のある日、シェルパの一人が一人のポーターを伴って私の元にやってきた。そのポーター痛そうに足を引き摺っているのである。見れば右足がポンポンに腫れている。熱も少しあるようだ。私では対処できないので原ドクターのところへ連れて行った。原ドクターが診察する。

ふくらはぎの外側辺りに、割り箸位の太さの木の枝が突き刺さっている。歩行中に刺さったのであろう。それが化膿して熱まで発しているのである。ポーターは痛くて自分では、手のほどこしようがないのである。

原ドクター、じっと患部を見詰めて暫くすると、やおら何も言わずにピンセットを取り出した。すると、頭がのぞいているその木の枝の先をピンセットではさんだ。刺さっている枝を無造作にぐっとピンセットで引き抜いたのである。3cm程の小枝であった。ポーターは、うっと、猛烈に痛そうに顔をゆがめた。すると黄色い血の混じった膿が傷口からビューと吹き出した。更に傷口を両手の親指で強く押すと中にたまった膿がドクドクと流れ出した。

その後の処置である。「尾上、足をしっかり押さえてろ」と原ドクター。言われるままに両手でぐっとポーターの足を押さえる。原ドクター、膿の吹き出した穴にヨードチンキをたっぷり含ませた脱脂綿の丸めたものをピンセットで穴の奥まで突っ込んだ。そして穴の中をゴシゴシとしごいたのである。さしもの豪の者のポーターもギャーとうめき声を上げて足をバタつかせる。それを二三度繰り返すのである。そ

の都度うめき声が上がり私も必死で足を押さえた。その消毒済みの傷口に化膿留めのクリームを摺り込んで包帯をぐるぐる巻きにして治療終わりである。

次の日、そのポーターである。少し足を引き摺ってはいたが私と目が合うとペコリと頭を下げて元気に荷を担いでいった。

キャラバン ～ポーターと靴～

キャラバンも後半にかかる。最大の難関シプトン峠越えである。標高4,000メートルを超える峠を二つも越さなければならない。おそらく残雪があるであろうからある程度の困難は予想していた。ところがである。明日から峠越えという日から季節外れの雪が降り出したのである。しかも上は吹雪状態で2日間降り続いた。辺り一面銀世界と化した。

裸足のポーター達は、靴が無くては雪道は歩けないという。シプトン峠越えするなら靴（運動靴）を支給して欲しいという。更にポーター賃の割増も要求してきたのである。2日経ってとりあえず天気が回復したので、靴を履いているポーターにポーター賃の割増しを認め先行させた。裸足のポーター用の運動靴は、近郷の村々にシェルパを走らせ手に入る靴を片っ端から買い集めさせた。

3日程で二百足程の運動靴が揃った。それをポーターに支給、併せてポーター賃の割増しも認め、快晴と天気の回復したシプトン峠越えに向かった。長い雪道なので全隊荷を一度にというわけにはゆかず途中でデポ。一度越した峠を再度荷を取りに戻らさせたりした。結局シプトン峠を全隊荷が越えるのに１週間も掛かってしまった。

雪中の裸足のポーター、
中には、若い女の子もいる

ところがである。裸足のポーター達、大多数が裸足のまま雪の上を歩いているではないか。支給した新品の運動靴は、荷の上にくくりつけてある。さすがに冷たそうに顔をしかめっ面して歩いていたが、快晴無風で気温も高く、少々の冷たさを我慢すれば歩けると踏んだのであろう。「チェッ、してやられた」と思った。しかしである。

そうもしてでも我慢して雪の上を歩くには理由がある筈である。恐らく彼等にとってその新品の運動靴は、故郷の村で待っているであろう奥さんや子供達家族への大切なお土産なのであろう。その健気で家族を思いやる優しい心根に胸を打たれてしまった。と思ってみたものの、それは、いささか感傷的かも知れない。少々、意地悪な見方をする。換金するつもりなのかもしれない。でもである。例えそうだとしても、その健気さには、変わりはないと言えるのではないであろうか。

キャラバン ～マンゴーとバナナ～

帰りのキャラバンの話である。帰路も往路と同じルートである。マカルー隊劇的な幕切れで登頂に成功した。帰りのキャラバンは、凱旋旅である。5月29日に全隊員とシェルパは、ＢＣを後にした。

この時節のネパールは、モンスーン期である。ベンガル湾で熱された気団（低気圧）が次々と北上、インド大陸に長期間に亘って大量の降雨をもたらす。ネパールもその影響をもろに受ける。この時期ヒマラヤも連日雪と雪崩で登山には適さない。東南アジアを含めてこの時期を雨期（モンスーン）と呼ぶ。

だんだんと標高の低い地帯に降りてくる。モンスーンにも晴れ間はある。太陽が照りつけると湿気も手伝って暑くなってくる。一枚一枚とストリップよろしく着ているものを順に脱いでゆく。下着からである。その下着であるが、登山期間中の60日間着っぱなしの代物である。そのラクダのシャツの背中はフェルト状になっている。捨てるのも気が引けるのでザックの上にくくりつける。

下は、亜熱帯気候である。街道のバッティ（雑貨店兼簡易宿泊所）には、マンゴーが籠に盛られて一杯並んでいる。とにかく安い。一籠買う。拳大で小振りである。どうやって食べるのかシェルパのを見ていた。

先ずマンゴーを両手で揉む。その揉み方もかなり強くである。中がグチャグチャになるぐらい揉む。マンゴーの皮は、固くて厚いので果肉

が外へ飛び出すことはない。そしてマンゴーの端っこを歯で食い千切って穴を空ける。そこから果肉入りのマンゴージュース状をすする。甘くて旨い。

そしてそのジュースが無くなるともっと口を広く裂いて種と残っている果肉を口の中にほおばるのである。口の中でもぐもぐと種をしごきもう食べるところがなくなると皮を捨てて、種を口から道端にペッと吐き出すのである。これを歩きながらやる。5個も6個も食べると結構お腹が膨らむ。今思っても涎が出る。実に贅沢な話ではあるまいか。

キャラバンの道は、住民の生活道路でもある。道端には、亜熱帯特有の植物や作物が実っている。農家の庭先にバナナがたわわに実っていた。モンキーバナナ（台湾バナナ）より少し大き目である。旨そうだったので畑を耕している農婦に売ってくれないかと言ってみた。指さして「カテパイサ」（いくら）。

すると農婦は、にっこり。しばし考えていて、私のザックにくくりつけてある何処かで捨ててやろうかと思っていた私の汗と油で煮しめた下着をじっと見つめ、指差したのである。「こんなものでいいのかよ。お安い御用」とばかり、農婦が捥いできた一房のバナナと交換した。その百姓の婆さん嬉しそうに捨ててやるつもりの下着を受け取った。

ほいほいしめしめ随分得したような気分になる。捥ぎたてのバナナと捨てるつもりの下着との交換である。早速歩きながら皮を剥いて頬張った。ところが旨くない。甘くないのである。もう一つ食べてみたが同じである。バナナは、ねっとりとしたあの甘さがあって旨い。

熟していないのかと思ったが黄色の光沢のない皮はするすると剥けるし、果肉も柔らかい。十分熟れている。一緒に連れ立って歩いていた隊員にも分けてやったが、そいつもまずいという。もう要らない。沢山余ったので捨てるのも何だと思い、傍を通り越したシェルパに食べないかとジェスチャーで示した。

そのシェルパ、ニヤニヤ笑いながら、「要らない」と手を振るのである。食いしん坊揃いのシェルパが要らないという。どうも変だと思って、何故食わないんだと聞いてみた。そのシェルパ、今度もニヤニヤ笑いながら曰く。「このバナナ人間は食わない。豚のエサ」だと。あんぐり。空いた口が塞がらない。道理であの婆サン・・・・。

申し訳ないが、そのバナナ、畑の中に放り投げてやった。

ＢＣ　～民コロ～

長いキャラバンも最大の難所、シプトン峠越えを乗り切り、一部後発組を残してはいたが、3月24日ＢＣ（ベースキャンプ）が建設された。そのときの話である。

サーダー（シェルパ頭）のミンマ・ツェリンが渋い顔をして我々隊員の前にやって来た。話があると。一人のシェルパを伴ってである。

サーダー曰く。シェルパへの支給装備と隊員のものとに差があるというのである。レギュレーション（ネパール政府が登山隊に発行した規定書）には、シェルパと隊員は同じ装備でなければならないと書いてある。それなのにシュラフ、羽毛服、セーターなどが隊員のものと比べると見劣りがするというのである。

シェルパと全く同じでは見分けがつかないということで事実色で区別したのは確かである。色違いで同じ物は、中々揃わない。見た目が違うのは明かである。といって性能に差別はつけていない。

それ以外にもキャラバン中にキャラバン用のシューズ（軽登山靴）が支給されていないとケチをつけてきた。靴はローバーの最新の二重高所靴を支給した。ぶっつけ本番では、足に馴染みが悪いのでキャラバンから馴らし履きさせるので軽登山靴は支給しなかった。隊員も一緒である。高所靴は隊員もシェルパも同一品である。

シェルパのアン・ノルブ

その都度サーダーの後には一人のシェルパが付き添ってくる。同じ男である。そのシェルパ、名前をアン・ノルブという。背がひょろ高く、顔は土気色で目付きが良くない。人を見透かすような目付きである。時たま後からサーダーに一言、二言助言をするのである。いかにも陰湿そうな男である。

他のシェルパは、皆愛想が良く、隊員とも意気投合していた。このアン・ノルブだけが当初

から隊員と馴染もうとせず、一歩引いて薄ら笑いを浮かべているのである。ヘビに遠くから睨まれているような気分で、陰険で実に嫌な奴だと隊員の間での評価であった。

原隊長代行と装備係の隊員とサーダーとアン・ノルブとの間で、シュラフ、羽毛服、セーターについての話し合いが集会テントの中で一時間以上も続いた。性能には、全く差異のないことを順々と説明したが、中々納得しない。

シェルパ側は、どうやら金銭での結着を図りたいらしい。ここで安易な妥協は許されぬので、こちらも徹底抗戦の構えである。シェルパ側も一度言い出した以上引っ込みがつかないのであろう。

隊員側が出した結論は、そんなに主張するなら隊員のセーターとシュラフをシェルパのものと交換してやろうじゃないかというものである。ただちに隊員全員のセーターとシュラフが集められた。シェルパのも集められた。隊員もシェルパもおよそ20名づつなので数は合う。

各自が適当にシェルパの物と交換した。ところがである。そのセーターとシュラフを私も手に取ったが、異様な臭気が鼻をついた。シェルパは風呂に入る習慣がない。産湯しか使ったことのない者がほとんどである。強烈な臭いである。正直これからこれを着て、このシュラフにもぐるのかと想像した途端に吐き気をもよおした。

特に二人の女性隊員は、拒否反応である。絶対に嫌だと言い張る。その気持ちは、100%理解できる。

この光景を目の当たりにしたシェルパ側もさすがに気の毒だと見たのであろう。根負けして主張を取り下げた。その替わり、ボクシス(隊が解散する時にシェルパ各自の働きに応じて出すボーナス)で見合わせるということで双方が妥協した。このボクシス制度、イギリスがシェルパを高所人夫としてヒマラヤ登山に雇傭して定着したものである。

このケチ付けの仕掛けは、あの男の入れ知恵に違いない。陰湿な野郎だということでアン・ノルブに綽名を付けた。「民コロ」である。こうしたシェルパやポーターとのトラブルは、当時のヒマラヤ登山には付き物であった。いわば賃上げ目当の恒例行事なのである。

民コロ:60年安保で学生運動が大いに盛り上がった。その中心になったのが全学連である。この全学連、安保騒動が収まると、その後の運動展開に亀裂が生じた。3つに分かれた。過激な暴力革命を主張する革マル派、中革派と民主革命を唱える日共系の民主青年同盟(民青)である。これを3派全学連と称した。

ご存知の通り過激派は、その後内部抗争が激しくなりさらに分派を重ね、ついには内ゲバと呼ばれる殺し合いにまでにも到る。一方、民青は、日共の指導のもと過激派とは一線を画し、理論闘争を中心とする民主革命運動に走る。過激派は、この民青のやり方は、手緩い、軟弱、陰湿となじり民青をもじって「民コロ」と揶揄嘲弄したのである。

当然のことではあるが、我々は、過激派などとは一切関係ないし、綽名を付したことに他意はない。その場の座興であったことは、言う迄もない。ちなみにこの「民コロ」君、シェルパとしては技量、体力共優秀であった。

第20回森の勉強会「長谷寺の与喜山の森」で開催のご案内

今回は奈良市桜井市初瀬の長谷寺の与喜山の森にて開催されますのでご案内いたします。
多くの方のご参加をお待ちしております。

日　時：11月5日(土)～6日(日)
場　所：奈良市桜井市初瀬　長谷寺の寺領　与喜山暖帯樹林
参加費：17,000円
定　員：30名（先着申し込み順）
締切日：10月30日

＊詳細案内は参加申込者に別途ご案内いたします。
＊問い合わせ及び、申し込み先　　南川陸夫
TEL＆FAX　　0569－42－5382
E-mail: r-minami@ktf.biglobe.ne.jp　　自然保護委員会　南川陸夫

支部友コーナー

◆支部友委員会山行計画
（平成28年11月～平成29年1月分）

11 月 2 日(水)☆☆
山域：鈴鹿　山名：御在所岳（1212m）
ﾘｰﾀﾞｰ：伊藤康信　締切：10 月 10 日

11 月 12 日(土)☆☆
山域：鈴鹿　山名：日本コバ(934m)
ﾘｰﾀﾞｰ：金谷正起　締切：10 月 23 日

11 月 26 日(日)☆
山域：養老　山名：養老山(859m)
ﾘｰﾀﾞｰ：田中　進　締切：10 月 31 日

12 月 3 日(土)☆
山域：伊勢中部　山名：錫杖ｹ岳（676m）
ﾘｰﾀﾞｰ：磯部　隆　締切：11 月 12 日

12 月 7 日(水)☆
山域：東紀州　山名：姫越山(503m)
ﾘｰﾀﾞｰ：伊藤康信　締切：11 月 17 日

12 月 10 日(土)☆☆
山域：西三河　山名：猿投山(629m)
ﾘｰﾀﾞｰ：金谷正起　締切：11 月 20 日

12 月 23 日(金・祝)☆☆
山域：各務原アルプス　山名：各務原権現山(317m)、岐阜権現山(316m)
ﾘｰﾀﾞｰ：今津英一朗　締切：12 月 3 日

1 月 18 日(水)☆☆
山域：鈴鹿　山名：藤原岳(1140m)
ﾘｰﾀﾞｰ：伊藤康信　締切：12 月 29 日

1 月 21 日(土)☆☆
山域：木曽山地　山名：富士見台(1739m)
ﾘｰﾀﾞｰ：金谷正起　締切：1 月 2 日

1 月 22 日(日)☆☆
山域：弓張山地　山名：神石山(325m)
リーダー：川北一博　締切：1 月 2 日

山行対象者 支部友会員及び支部会員

申込み方法 ・支部友会員は申込締切日までに、各山行リーダーが示す方法で申し込む。
・締切日　原則山行日 20 日前まで。（締切日を過ぎての参加空き情報はﾘｰﾀﾞｰに直接問い合わせ下さい）
・支部会員は申し込み締切日の翌日以降に、各山行のリーダーへ問い合わせる。
・山行の募集人員を超えない範囲で、支部会員の参加申し込みを受け付ける。

次回支部友ミーティング 開催内容のお知らせ

① 第21回「手づくり忘年会・新入会員歓迎会」
日時：12月13日(火) 19：00～21：00
支部ルーム

② 第22回「スマホを山で活用しよう」
日時：平成29年2月14日(火)
19：00～21：00　支部ルーム
講師:鈴木　慎吾氏(東海支部山行委員長)

③ 第23回「最新の登山グッズ」
日時：平成29年4月11日(火)
19：00～21：00　支部ルーム
講師：千葉　泰丈氏（駅前アルプス社長）

支部友会員数
平成28年○月現在／○名

ﾘｰﾀﾞｰ連絡先
尾上　昇　FAX：052-832-3878
ﾒｰﾙ：onoe@onoe.co.jp
伊藤　康信　携帯：090-2577-8137
ﾒｰﾙ：kobitokaba@mediacat.ne.jp
榊　將美　携帯：090-7237-4410
ﾒｰﾙ：m.sakaki@minds-consulting.jp
金谷 正起　携帯：090-9931-3600
ﾒｰﾙ：kanaya.masaki@rouge.plala.or.jp
川北　一博　携帯 090-3956-4123
ﾒｰﾙ：kawakitakazuhiro@outlook.com
村瀬 恭平　携帯：090-4186-9876
ﾒｰﾙ：hoshizakari@ezweb.ne.jp
田中　進　携帯：090-9191-8666
ﾒｰﾙ：t-susumu@peace.ocn.ne.jp
今津　英一朗　携帯 090-2616-7549
ﾒｰﾙ：imazu.eiitirou@maroon.plala.or.jp
磯部　隆　携帯：090-9180-7245
ﾒｰﾙ：takass@yk.commufa.jp
松本　陽子　携帯：090-7859-4031
ﾒｰﾙ：yo-kom@nifty.com

個人山行もＪＡＣ東海登山届けを！

専用携帯電話(担当　山田明美)
080－2632－3776

上高地の常さん

評議員　大口瑛司

いささか私も年取ったものである。古い話にことさら郷愁を感じるようになったかもしれない。常さんの話なんて自分の時代よりも、はるか昔のことなのに。

今は上高地といえば登山基地というより観光地としてのイメージが強い。現に立派なホテル、旅館が幅を利かせ、パンプスの女性が河童橋を行きかう時代である。

ずっと気になっていた一文があって、それが何に書いてあったか、どこにしまい込んだか思いだせないままでいた。

卒寿となり、終活のつもりで古いものの整理をしていたら、捨てる寸前に消えかかったプリントが出てきた。それが跡部昌三氏の常さんに寄せる思いを新聞に投稿した「常さんの思い出」のコピーである。

私が気になっていたのは常さんが冬に、学生さんに貸したアイゼンが返ってこず、その後難儀した話である。人の好い常さんにひどい事をするヤツがいるものだと、強く印象に残っていた。この「常さんの思い出」に至る話が別に、これも同氏がOKTの「峰」に書いていたので合わせて紹介したい。

「常さんの思い出」　　跡　部　昌　三

内野常次郎氏なんというと、だれかしらんと首をかしげる人が、ほとんどであるが「上高地の常さん」といえば「うん、あの人か」という人は多い。その常さんがたとえ身体が悪くなったとはいえ、夏冬となく永年山に結ばれ常さんにとって故郷といってもいい上高地を下った、というニュースは一寸前のこと、それがこの11日ついに亡くなったという。

おなじ死ぬのなら上高地で死なしたかったと思う人は多かったろう。嘉門治の時代ならいざ知らず、しかし、嘉門治の跡をついてからずっと住みなれた上高地を、穂高の山々を背に下るときの心情はどんなであったろうか、心で泣きながらも常さんは、おそらく何もいわなかったと思う。

戦い(第2次大戦)がどうなったかも知らない常さんにも統制とインフレの荒波は情け容赦もなく吹きすさび一枚の衣類はおろか、食料の最低のものさえ欠くようなことが多かった。

内野常次郎

ふと冬まえのこと、二ヶ月間も塩なしで食うものといえば兎の肉ぐらいだったという、きびしい山の自然のオキテのまえにただ従順な常さんであった。一言の不平もぐちもいわず、もくもくと生活がつづけられていたのだ。この場合の忍従は自身の体との引換えを意味している。

今年の六月の上高地で足腰も不自由な常さんをみて、久しぶりに会う喜びも何処かへ、私の心は暗かった。夏秋と、冬と、こんどの冬はいいかしらんと真剣に思った。私達はタキ木を割り、大川から水を汲んできて、ストーブにのせてから、後髪をひかれる思いでサヨナラをした。

その時、断るのを無理にたのまれて、常さんはある人にアイゼンを貸して、その代わりとして腕時計をその人は置いていった。動かない時計を手にして、常さんはいつに似合わぬ口調でその人の不信をなじっていた。常さんをだますような人に、私も強いいきどおりを感じたが、かってない常さんのいいぶりが私にはよけいに気にかかった。

上高地草分けの嘉門治の弟子として兄貴の庄吉もすでにこの世を去り、上高地の家は全く廃屋にひとしく、常さんまた上高地を後に中尾でついに逝く、穂高をわたる白雲にも、なぜかさみしさと、悲しさがつきまとっているように思えてならない。

上高地による登山者で常さんの世話になった人は多い。ガイドとして育まれてきた人も多い、常さんにはもう少しいてほしかつた。しかし、これ以上苦労させようとは思わないが、生きる喜びをお互いが分かち合いたかった。だが、この世は常さんの住むよう余地などありよう筈のないことをしるとき、私は一層のわびしさ

を感ぜずにはいられない。
（昭和24年12月16日　名古屋タイムズより）

「神河内の臭覚を求めて」　跡　部　昌　三

発電所や温泉ホテル、清水屋、郵便局等では塵も神河内の臭ひなんてありゃしない。岩魚の孵化場や西糸屋、営林署も駄目だ。庄吉さんの處も田舎家程度だ。

嘉門治小屋へ行くと何處となくそんな臭いがする。守一さんや純さん、傳さん等と話していると一層濃厚になって来る。純さんが大川端で釣っている姿を見ると、ありし嘉門治に生写しだ。ほゝかむりして、紺のパッチ袢天で、毛皮を背に、心持腰をかがめて、そこに岩魚を入れる籠がついて居る。左手の受網を差し出しているところなど、実際なつかしい昔の臭いがする。資本主義的近代化の臭いは嫌いだ。

牧場へ行っても事務所ではいけない。春治さん（牧夫）の居る炉端へ行かなければ臭いをかぐ事は出来ない。あの大きな図體で『はるか居るネ』といってニッコリと来ると、無性に来たことが嬉しくなる。

西糸屋の裏の島々案内人の詰所もいゝ。五千尺横の久内さん、又温泉ホテル裏の常さんのところ等は実際優秀なる見覚をもってる。久内さんも、常さんも小さな小舎に一人きりで住って居る。薄暗いランプの下で、濃い茶を、飲み、飲み、釣の話、猟の話、山の話、神河内の昔話などが豊富な材料で繰り返されている。

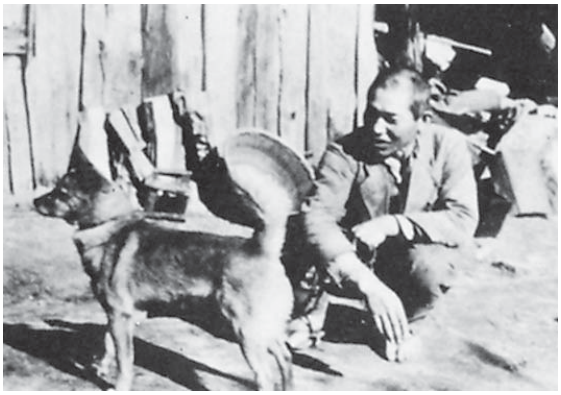
常さんの小舎のある夜、余り話に味がいって、夜が更け、せんべい蒲團にくるまって寝た事もあった。枕もない、着のみ着のまゝに、ころりと横になればそれでいゝのだ。手酌をやりながら常さんが、月桂冠の効能を説いてゐるのを、夢とも、うつつとも聞きながら。

こんな處に真実の神河内の臭ひがあるのではなかろうか。

（昭和7年2月23日
「峰」神河内夜話より原文のまま ）

［ 筆者注 ］

内野常次郎（1884～1949）：岐阜県上宝村（現飛騨市）中尾の出。嘉門治の弟子として通年上高地の小屋（中日新聞上高地支局の前に常次郎の碑がある）に住み、山案内と狩猟で生活。無類の酒好きで、その純朴な人柄から岳人達に慕われた。



飼い犬と常さん

上条嘉門治（1847～1917）：明神池のほとりに小屋を構え、杣人、猟師として暮らす。ウェストンを北アルプスに案内したとして有名になった。

大井庄吉：　常さんの兄弟子で嘉門治と同じ安曇村島々の出。上高地に小屋を構え、一家で夏だけ暮らす。

跡部昌三（1905～1991）：東海支部設立発起人のひとりで名古屋山岳会の創立者。昭和初期に結核療養のため数年上高地で過ごし内野常次郎ら、案内人や上高地で働く人達と親交を結ぶ。

神河内：上高地と同義語。本来は穂高神社奥宮が明神池の畔にあって、明神周辺のことを指した。

「峰」：OKT（大阪管見社登山部）部報の会員版で原稿をそのまま綴じたもの。

「真実の人生に生きた　内野常次郎君　ここに眠る」
槇有恒

東海支部の蔵書からの一冊⑨

図書委員会委員長　**石田文男**

『日本の名山８〈立山〉』

この立山の目次を見ると室生犀星、深田久弥、志賀重昂、新田次郎はては泉鏡花までの立山を中心とした近辺の山や谷の煌く紀行文などを紹介していて、いわば著名な35人の短編集とも言え興味深い。

中でも山を紹介する本でありながら面白いと思ったのは、映画監督の熊井啓が「黒部の太陽」を撮るために黒部入りして受けた感動の記、「関電トンネルをジープで外に抜けるといきなり正面に立山連峰が迫り、眼下に黒四ダムの壮大な眺めがひらけた。私は圧倒されてしばらくの間言葉を発する事ができなかった」である。まだ一般の人が入れない場所からの眺望に踊る姿が彷彿としてくる。

また、執筆者には「信州の安曇野に生まれ北の空に後立山連峰を眺めながら幼い日の数年間を過ごした。屏風のように屹立する連峰は〈中略〉自然の表情を見せた。あの屏風の彼方には、一体何が隠されているのか、私にとってそれは大きな謎であった」そんな想いが過り、より大きな憧れ、感動に繋がったであろうことが想像に難くない。私にもつよく響いてくるものがあった。

坂倉登喜子、梅野淑子の「今は観光で簡単に行けるようになった立山だが、かつては女人禁制厳粛な宗教の山であった」にも引かれる。さらに次の「立山信仰伝説では女性を忌み避ける趣がことに強く女性が山に登ると天候が崩れる。・・・女性が登ろうとすると石や木になってしまう。立山近辺に残っている姥石、美女杉、鏡石等と言う地名はその伝説に由来している。〈中略〉大正8年になっても富山の女学生39人が登ると新聞が大々的に取上げ、天候が悪化すれば《山神の怒りにふれた女学生》などと掲載された」は興味深々すらすら読める。

大正8年夏、はじめて立山に登った村井米子は「神官白衣の先導で三の越あたりから草履も足袋も脱がされ裸足で雄山のお頂上をした。立山は山そのものが御神体ゆえ、一切の汚れを払い清浄な裸足となって詣でる・・・と言うわけだ。それほどに千年来の信仰を護っていた立山の、雄山の直下にトンネルを貫きバス、ケーブル、地下電車と観光の山と化した現時点を、何というべきか。少なくとも機械文化が進んで人間の精神文化は、退化したと思われる」と述べていて、まさに《人間の精神文化》を考えさせられた。

どの章も読み応えがありさわやかで、この書の重みさえ感じさせるものだった。

1997年4月30日発行253頁

図書委員　山中光子

『日本の名山17　〈北岳〉』

田中澄江が北岳の花々に出会いたいと
高山植物の中を歩いていく。
串田孫一や田部重治が米や味噌を背負
って白根三山をゆく。
長谷川恒男が酷寒の北岳バットレスを
仲間と登攀する。
白旗史朗が「わが永遠の山」と表す北岳。

北岳は、花と展望、縦走路の素晴らしさは勿論の事ですが、さらなる多彩さと深遠さをそれぞれの著者が表しています。北岳への深い想いが感じられる一冊です。

特に心ひかれた著者の一人が沢田真佐子です。「単独の北岳」と題してあります。仙丈の峰からの北岳の英姿に魅かれ、広河原から北岳へと登るのですが、昭和28年7月の南ア・白峰北岳は、今よりアプローチが長く、山小屋は無人。そのことを知って読み進むと当時の大変さが身にしみます。

途中、天候が崩れ快晴ならばどんなに楽し

いであろうと思いながら中白峰を過ぎ、間ノ岳に至るが、途中から暴風雨となり、ビバークし下山する話です。大門沢の降り口の取りつきが分からず、道を探す。その大門沢は増水で渡渉と藪漕ぎ、高巻きの連続。途中で死を覚悟しての下山となる。「やっと里に着き、里のお爺さんから、よう生きて来たもんじゃと言われた」との遭難手記です。

山中で暴風雨に会いたった一人で山中11日間を耐えた体力と精神力には驚きました。
手記が日記形式で書かれ、心情がつたわります。沢田さんが、「奈良田の吊橋に着き、無事にこの橋を渡れた自分をしみじみ幸せに思いながらゆっくり歩いて行った」との文には、涙ぐんでしまいました。

既に北岳に登った人、これからの人にも北岳を味わい魅力を感じさせる一冊となります。
1997年8月5日発行　　253頁

読図会　会員　滝　清子

『日本の名山14 〈富士山〉part2』

深田久弥が『日本百名山』で富士山を次のように述べている。「この日本一の山について今さら何を言う必要があろう。かつて私は『富士山』という本を編むために文献を漁って、それが後から後から幾らでも出てくるのにサジを投げた。おそらくこれほど多く語られ、歌われ、描かれた山は世界にもないだろう」と。

富士山part2を読んでみて本当にそのように思う。富士山は日本のシンボルとして畏怖と崇敬、信仰の対象であり、世界文化遺産にも登録されている。また、その秀麗さゆえに海外の人から人気を博している。

この本を読んでみると深田久弥の言う次から次へと話題があり、そうだったのかと共感するところ大きく、新しい知識を得ることができた。

現在も新幹線から富士山が見えたら何か得をしたような気持になるし、山に登って遠くに富士山が見えれば、「あっ、富士だ！」と皆が指さして感動する。いつの時も人を引き付けて止まない。やはりここが日本人にとって富士山は特別な山なのだと思う。

さて本書で興味深い文章を抜粋してみた。どの章も執筆者の山に対峙する真摯な想いと、それを育んできた時代・生活環境の背景が具現されていて、それぞれの執筆者の特徴とも言え私に迫ってくるものだった。

・P10～11（富士　吉野弘）

「葛飾北斎は『富嶽三十六景』を描いた
安藤広重も『富嶽三十六景」を描いた
・・・中略・・・

一流の人の一流の作／富士燦然／一流の人は一流の褒め方をする／では、一流でも二流でもない私はどうすればいい？／絵に描かず、歌や句にせず／富士を、目で愛するだけにしよう／目で愛することには二流も三流もない／誰でも一流／いじけけることはない／思わず見つめてしまうこと、それこそ／一流の褒め方だと／信じていよう／それでいい、と／富士が私に目配せを送ってくれた」

・P37（富士山　山下清）

「〈中略〉･･･おれは『もし日本中にある山がみんな富士山と同じように高くて雪がつもっているとすると日本中にある山は皆美しい山になってしまうと、どの山が美しい山だかわからなくなってしまう心配がある。そうすると美しいのがふつうになってしまうので、富士山だけでよかったと思います』と言ったら、よその人が『そうだ、お前の言ったとおりだ、しかし富士山の美しいかんじがするのは、たまに富士山を見て、珍しいから美しいので幾ら美しいと意っても毎日同じ形をしているものを何回も何回も見ていると見あきてしまう。･･･何でもたまに見えると珍しいから美しいのです』と言われた。《中略》富士山を見る前はもっと美しい山だと思っていたものが、本物を見たら、自分の思ったより美しく見えなかった。はじめ見たときは美しく見えても、よくばっていつまでも見ていると、美しく見えなくなってしまう。何でもよくばって見ていると美しく見えなくなるという事がよくわかりました」

こんな素朴な感想文に惹かれる。そして、よく人の心の移ろいを語っている。

・P48（天空海闊　白旗史朗）

「すばらしい朝をむかえ、壮大な日の出を展開させ、無限そのものの大自然と富士山のハーモニーを堪能させてくれたのは南アルプスであった。この三千メートルを抜く巨峰十三座を連ねる大山脈は、ありとあらゆる山頂、

ありとあらゆる場所から富士山を望見させ、惜しむことなく、その時々に新しい朝、新しい美をくり広げてくれた。
《中略》かつて私のとなえた『高峰は別の高峰と対峙するとき、そこに比類ない高度感と緊迫感をかもし出す』ということばが、如実に具現されるのが、この富士山と南アルプスの山々との関係である」

この件などを読んでいると以前、南アルプスを縦走したとき《随所に富士山が見え、富士山が見えることが当たり前と言う、贅沢な景色に満足》したことが彷彿として懐かしい。

最後に富士山を読もうと思った動機は今年(平成28年)6月に吉田口登山道から5合目まで登ったことにある。それに世界文化遺産に登録された一部を見てみたいと前から思っていた。また、現在は富士山スカイラインで5合目まで容易に行けるが、昔の登山者は登山口になる富士宮神社から登っている。現在のように登山用装備も十分でない時代に、どんな出で立ちだったのかなどにも興味を持ったからである。

江戸時代には富士講信者が集団登山をしたと言う。・・・今回登ってみて昔の面影が随所に残っているのが見られた。馬返し、登山記念の石碑、鳥居の左右に猿の像、宿坊の跡、御座石が祀られ昔の面影があり感慨深かった。昔の登山の様子も本書に書かれている。

このシリーズには『富士山』を取上げた章が3冊に所収されている。今回はPart2に取り組んでみたが読み応えがあり、この先3冊に所収の全編を読んでみたい。そして機会があれば取上げてみたい。

1997年12月15日発行　　250頁
『日本の名山』（20巻＋別巻4）
串田孫一、今井通子、今福龍太編
46判変形　　発行：博品社

読図会　会員　浅野舜三

9回目の紹介、第2弾となる『日本の名山』シリーズ（巻20、別巻4）は「立山」「北岳」「富士山」の3冊。先回同様、各原稿筆者の思いがよく表れていることを分かって貰えると思う。読者に「そんな中から本への興味・自分の山への想い」が伝われば、・・・この蔵書紹介シリーズに意義があるものと。

東海支部俳壇

春　　山蕩児　陶酔

残雪や藪覆ふ尾根思ふまま
奥美濃の残雪の山々、ルートは自由自在。

雪融けの沢の瀬音や梓川

雪締り雪洞（ゆきほら）の中銀の城
三月になると雪が締り雪洞は、実に快適。まるで我が城。

木漏れ日の川瀬に踊る斑紋（まだらもん）
降り注ぐフィトンチッドの芳わしき
フィトンチッド：樹木などが発散する、細菌などの微生物を抑制する化学物質。

年輪も百を数えし山桜
山桜の老大木、今年も見事な満開の姿を見せてくれた。

シベリアの車窓に霞むバイカル湖
シベリア横断鉄道に乗る。列車は、バイカル湖畔を走る。

限りなき白夜の登攀何処までも
極北の山を登る。白夜は、日が暮れない。体力の続く限り登り続ける。

君慕ふ胸のときめき朧月

西山秀夫

ハイカーや登山者の行列が途切れなく続く
ぞろぞろと八方尾根を蟻のごと

そそり立つ不帰ノ嶮（かえらずのけん）夏の空

山襞（やまひだ）を埋める雪渓剣岳

唐松山荘にて
ビール飲む例へれば実(げ)に甘露めく

岩攀じて雲より高し五龍岳

念願の名山に立ち夏終わる

白馬なるいで湯に汗を流しけり

味の濃き肉を食ひたし
普羅忌かな

『日本風景論』
山の日や志賀重昂の本を読む

八月の緑なす谷溯る

べったりと巌に咲ひてるいはたばこ

東海岳人列伝(4)
～日本の山を発見した志賀重昂～

編集委員会　**西山秀夫**

志賀重昂は『日本風景論』の冒頭に「江山洵美是吾郷」 という漢詩を掲げました。これはわがふるさとの山や川は洵(まこと)に美しい、という意味である。ここでいうわがふるさとは出身地の岡崎のみならず日本全体です。つまり日本の山を愛しましょうという提言である。

平成28年から8月11日が「山の日」という祝日になり山を考えるにふさわしい人物です。

どんな人物だったのでしょうか。

文久3(1863)年12月25日　岡崎市康生町に誕生。明治元(1868)年6歳の時、父・重職死去。

父は岡崎藩の儒学者で佐幕派。没後は跡取りが15歳未満ゆえに家禄は没収される。母・淑子の実家の松下家で育つ。 明治維新で父は失業と同時に死ぬ。そして収入までも絶たれる。幼くして大変な波乱に見舞われた。

幸いに、父の教え子の小柳津要人の援助で学校へ行けた。小柳津要人は1844年生まれの岡崎藩士でした。明治6年に丸善に入社。後に洋書輸入を手掛けて洋書の丸善の名声を得た人物。岡崎市の名誉市民にもなった。

明治7年(1874年)11歳より攻玉社で英学・数学・漢学を修めて同11年(1878年)に退学。漢詩文の素養はこの時期の学習による。

明治11年　大学予備門(東大の前身)に進み、約2年間学ぶ。明治13年(1880年)、札幌農学校に転じた。理由は家禄没収による経済難からか。札幌農学校は学費が安いことも理由。「少年よ大志を抱け」で有名なクラークは去ったあとでした。その当時には東京大学と札幌農学校しか大学はなかったのですが、授業料も寮費も国庫で給付してくれる制度があったので札幌農学校へ進んだのです。明治17年(1884年)、17歳で札幌農学校を卒業 。その後、学校教員になるが上司とのトラブルで退職。丸善の支配人になっていた小柳津要人の世話で丸善に入社。英語力を生かして輸入書の翻訳を手掛ける。

英語力を武器に、通訳として、明治19年(1886年)、23歳で再び軍艦「筑波」に便乗して南太平洋の諸島(カロリン諸島、オーストラリア、ニュージーランド、フィジー、サモア、ハワイ諸島)を10ヶ月にわたって巡り、翌年に丸善から出版した『南洋時事』で、列強の植民地化競争の状況を報じて警世した。この著により、東京地学協会の終身名誉会員に推された。

若き日の志賀重昂翁

世界中を地理学者として見聞すると日本の山河への愛着が高まる。「三河男児歌」は明治22年10月1日のみかは新聞に掲載されたのが初出である。志賀26歳の作。明治憲法発布に際し、薩長中心の明治政府だが三河人も元気を取り戻して頑張ろうという激励の意味と言います。

全文を掲載します。

汝見ずや段戸の山は六千尺
絶巓天に参はりて終古碧なり
又見ずや矢矧の水は三十里
急湍石を噬みて矢より疾し
憶う昔孤軍峻険に拠り
勤王を唱え妖?を払わんと欲(ほっ)す
借問(しゃもん)す当時将たる者は誰(た)ぞ
足助の次郎臣重範(しげのり)
須臾(しゅゆ)にして賊兵の勢は雷の如く
千騎万騎山を(ゆるが)して来る
我が軍奮戦して弓劍(きゅうけん)砕け
七分は難に死し三分は潰(つい)ゆ
潰ゆる者は辱(はじ)を忍んで隴疇に匿れ
臥薪嘗胆仇(あだ)を報いんと欲(ほっ)す
機や到らず余烈(よれつ)在り
鬱々(うつうつ)久しく待つ天定まるの秋(とき)吁嗟(ああ)上帝の眼は朦朧(もうろう)たらず
忽(たちま)ち此の土に英雄を降す

矢矧(やはぎ)の水は清く段戸の山は秀でたり
鐘霊(しょうれい)孕(はら)みだす東照公
撥乱(はつらん)反正皇猷(こうゆう)を賛け
舜雨堯風(しゅんゆぎょうふう)六十州
何ぞ料(はか)らん治極(きわ)まって人心弛み
文括武熈(ぶんてんぶき)表裏に変ずるを
天下の大勢西南に趨(おもむ)き
三河の佳気恐らく長(とこしな)えに己まん
挽回(ばんかい)豈(あ)に時無からんや
復興必ず期有り
吁嗟(ああ)段戸の山は誰(た)が為に高く
矢矧(やはぎ)の水は誰が為に号(さけ)ぶ
三河男児其れ行け
三河男児須(すべから)く奮起すべし
以上

岡崎東公園の碑文は「汝見ずや段戸の山は五千尺。雲巓天に参はりて終古碧なり」とあり、推敲を重ねたものが碑に刻まれている。

余談ですが、旧制八高は旧制高校最後の設立、名古屋帝大は昭和14年設立で九州帝大より29年も遅く最後になったのは薩長の徳川(名古屋)に対するいじめだったのでしょうか。権力の座を降りると権威も失墜しますが、復興を期待して奮起せよ、と励ましているのである。

明治27年(1894年)8月からの日清戦争。松野鉄千代と結婚。31歳で『日本風景論』を出版した。これは今も岩波文庫と講談社学術文庫で読める。山岳書の古典です。 岩波文庫版には小島烏水の解説がある。

漢詩文で科学的な紹介文で書かれた。但し、種本があった。アーネスト・サトーらの編『日本旅行案内』(明治14年)と、「登山の気風を興作すべし」の「登山中の注意」の部分はガルトン『旅行術』からだ。英語力抜群の志賀重昂はここを翻訳し、原典を明記しなかった。このため登山家でもなく探検家でもない志賀重昂の著書の謎とされていた。昭和51年になって、日本山書の会から出版された黒岩健『登山の黎明～日本風景論の謎を追って』で剽窃として告発された。大きな反響があり、のちにペリカン社からも出版された。

しかし、これによって著書の名声は揺らぐことはなかった。ドナルド・キーン『日本文学史』近代・現代編(中公文庫)によれば明治初期は漢詩文、翻訳の時代と変遷を描く。著作権の意識もなかった時代である。例えば、尾崎紅葉の名作とされる『金色夜叉』(明治30年)もアメリカの大衆小説『女より弱きもの』が種本であったという。現代でも三島由紀夫『潮騒』はギリシャ神話の「ダフニスとクロエ」が種本という。

明治中期になって言文一致に移行するまでの近代化を急ぐ過渡期であった。『日本の近代3』(中公文庫)によれば当時はまだ日本語が確立されていなかった。日清戦争を戦う中で、外国人が入って来たら対応する言葉がない。つまり日本語無くして国民もなかったのである。

英語に堪能な志賀重昂にとっては誰よりも早く翻訳して紹介する意義が最も重要であったと思う。先手必勝というわけだ。そしてこの部分が多くの若者を知識のみならず、登山の実践へと誘った技術の紹介が光る。近代登山の啓蒙に貢献したわけだ。本書は15年に亘って15版を重ねるベストセラー且つロングセラーとなった。後に小島烏水が読み、登山に目覚め、明治38年の日本山岳会設立へと行くのは10年余り後のことだった。この功績で名誉会員にも推された。

志賀重昂を国粋主義とかナショナリストと評価する向きもあるが、「宗教・徳教・美術・政治・生産の制度は「国粋保存」で守らねばならぬが、日本の旧態を守り続けろとは言わない。ただし西欧文明は、咀嚼し消化してから取り入れるべきだ」(『日本人』第2号所載。世界を旅して欧米列強の植民地化の実態を知り、かつ清国に勝利して、漢民族が日本に留学してくる立場の急変に日本を主語とする考えに至らない方が不自然である。世界の山や自然を見てきた目で日本の山が世界で一番美しいと扇動することにためらいはなかった。小島烏水も人は自分を扇動者というが志賀重昂こそ扇動者であると讃える。

富士山を名山の基準とした。よほど富士山が好きなのであろうか。ちなみに死後出版された志賀重昂全集の編集者は志賀富士男になっている。長男にも富士男と命名しているほどの凝りようである。付録の登山の気風を興作すべし(岩波版P193)の、三、「水の美、奇

は山を得て大造す」を引用してみよう。

水、山にありていよいよ美、ますます奇を成し、平面世界にありて看得ざる水の現象は、山にありてのみ能く認め得。水の最も晶明なる者、最も平和なる者、最も藍靛(らんてん)なる者は山中の湖これを代表し、水の最も最激烈なる者は山蔭の瀑布これを代表し、水の最も清冽なる者、最も可憐なる者は山間の渓水これを代表す。凡そ水の睡り怒り咲(わら)ふの状貌は、山にあらずんば竟に観るべからず。加之(しかのみ)ならず巌は水を承けて緑潤となり、水に齧(か)まれて奇態怪状を呈出す。水の美、水の奇は山を得てここに大造し、巌の美、巌の奇は水を待ちて始めて完成す。以上

沢登りの勧めのような漢詩文である。平面世界とは自分らが起居する街の暮らしのことで、街では水の美を見ることはできないが山ならば見られる。渓谷美は山の奥深く入って見られるの意。

もう一つ、奥三河の明神山に突き上げる宇連川の支流の乳岩峡の部分を引く。(講談社版P310)

石灰岩の浸食中、奇観のさらに奇観なるは石門にして、かの絶大無双なる川合の「切通」(参河北設楽郡三輪村大字川合、豊川の上流にあり、高さ44m、右側の門柱に洞穴あり。この傍近に石灰岩の洞穴処々に散在す、洞中石鐘乳多し)のごとき、実に渓流の石灰岩を浸食して穿鑿するところ、真個に鬼工。火山岩、石灰岩における流水浸食の結果、奇警雄快なるのみならず。　以上。

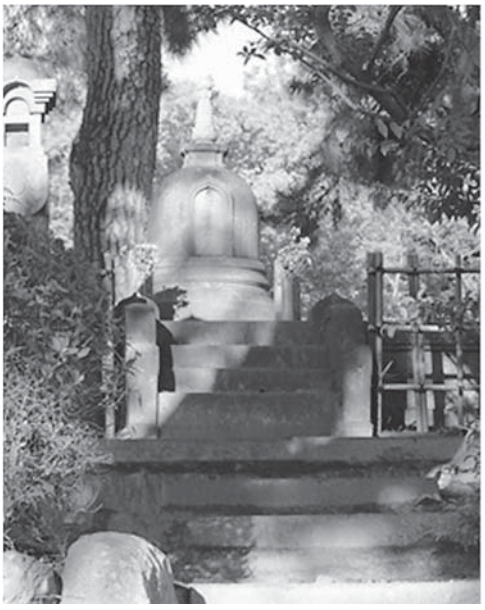
とまあ全編こんな調子だから現代の私どもには読みづらい。しかし、漢字は表意文字なので繰り返し眺めていると意味は分かる。昔は音読したとも言われる。これが明治の漢詩文なのである。

志賀重昂の漢詩の教養はプロであった。後に日露戦争において外交顧問、通訳として参加して、乃木将軍の知遇を得た。乃木将軍に漢詩の添削を依頼されるほどだった。司馬遼太郎「坂の上の雲」では、乃木から渡された漢詩を読み志賀重昂が「これは神韻だ」と感動したくだりがある。乃木希典は、「二〇三にれいさん」の音から「爾靈山にれいさん」の語を得た。多くの戦死者である「爾の靈の山なんぢれいやま」である。203は標高である。

爾霊山嶮豈難攀
男子功名期克艱
鉄血覆山々形名
万人斉仰爾霊山
にれいさん　けんなれども　あに 攀ぢが
たからんや
だんしの　こうみゃう　こくかんを　きす。
てっけつ　山をおほひて　山形 改まる,
ばんじん　ひとしくあふぐ　にれいさん

・・・203高地において日本人とロシア人が山の形が変わるほど戦って多くの血を流した。日本のために犠牲になった人をみんなで想い仰ぐことよ。

志賀重昂は幼少期の人生の波乱を才覚で乗り越えた。維新以来、世界史に登場した激動の近代日本を見聞しつつ、昭和初期に没した。こんな偉人が愛知県岡崎市の生まれだったとは。ちなみに犬山市を流れる木曽川の日本ラインも志賀重昂の命名になる。上流の恵那峡も同じ。晩年は死ぬまで早大教授として奉職。昭和2年3月死去、享年63歳だった。戒名は章光院矧川日浄居士。矢作川の字を入れるところが志賀重昂らしい。墓地は東京都杉並区下高井戸宗源寺』にある。岡崎市世尊寺に分骨、美濃加茂市祐泉寺境内には記念碑もある。



岡崎東公園内の志賀重昂の墓
(純インド様式の「スツーパ」)

委員会報告

【東海Youth】

東海Youth　８月活動報告

１．会員動向（8/20現在）

29名・・・内休会1名

２．山行報告（～8/20）

（１）定例山行

イ）7月29日～31日　北ア縦走
（唐松岳～白馬岳）　6名

ロ）8月11日　南信・高峰柳川（沢登り2回目～）
9名＋１

ハ）8月19～21日　北ア縦走
（燕岳～槍ヶ岳～上高地）4名(-2)

ニ）8月19～21日北ア縦走
（燕岳～大天井岳～三股）4名(-2)

（２）個人山行

イ）7月23日　南八ヶ岳・権現岳（観音平往復）
1名＋1

ロ）7月24日　富良野岳～十勝岳　1名＋1

ハ）7月24日　竜ケ岳（石榑峠往復）　1名＋3

ニ）7月24日　南信・高峰柳川(下見)　1名＋1

ホ）7月26日　旭岳（姿見の池～往復）1名＋1

ヘ）7月27日　竜頭山（三河）　3名

ト）7月30日～31日　西穂高独標　3名

チ）7月31日　彦坊山　2名

リ）8月7日　片知渓谷沢登り　2名

ヌ）8月7日　北ア・爺ヶ岳　1名

ル）8月7日　岩トレ（御在所岳・指導員研修）
4名

オ）8月7日　木曽駒ヶ岳～宝剣岳
（千畳敷より往復）　2名

ワ）8月13日　伊吹山(神社～山頂往復)2名

カ）8月13日～14日　西穂高独標　4名

３．山行計画（～9月20日）

（１）定例山行（夏山）

イ）8月27日～28日　中ア・摺古木山・黒川
（初沢登り者対象・・・テント泊）9名

ロ）9月10日　三河・鞍掛山　11名

（２）個人山行

イ)9月3日～4日　奥美濃・竹屋谷(指導員研修)
2名

ロ)9月13日～16日北ア・北鎌尾根(指導員研修)
2名＋2

４．夏山山行の打ち合わせ

イ）8月3日(2回目)　北ア縦走
（燕岳～槍ヶ岳～上高地）　6名

ロ）8月5日(2回目)　南信・高峰柳川
（2回目の沢登り）　11名

ハ）○月23日(3回目)　北ア縦走
（燕岳～大天井岳～蝶ヶ岳）　6名

５．運営委員会（支部ルーム）

9月3日

1. 報告・・・各山行の問題点、課題の検討
2. 計画・・・～28/1月までの定例山行地、日程の検討
3. 合同キャンプ・・・御池岳西面（10/29～30 本部YOUTH)
4. 検討課題・・・会員の為のユースにするために！

６．その他

8月11日　山の日イベント協力　4名
東海ユース代表　山田明美

【ボランティア委員会】

締め切りの関係で前号に間に合わず日にちがたちましたが、終了した2つのブラインド登山を紹介します。

①第14回目になるブラインド登山が、5月29日(日)美濃の池田山(924m)で行われた。5名の全盲の方を含み、視覚障がい者が11名、支援者が37名、合計48名での登山になった。

ブラインド登山の皆さん

霞間ヶ渓から焼石神社経由、池田山山頂を往復するコースで、3名の初参加のブラインド登山者にとっては、結構ハードだった。山頂では、恒例となった青年部による食事の提供があり、今回はそうめんがふるまわれた。全員、無事下山した。

②委員会の公式な行事として、支部に在籍する視覚障がい者を対象にした、月例ブラインド登山を行うことが委員会で決定した。サンフラワ

ー登山の愛称で、第一回目が7月30日(土)南信州・尾高山において、シラビソ峠から往復するコースで行った。4名の視覚障がい者と8名の支援者、合計12名が参加した。

第1回サンフラワー登山の皆さん

第二回のサンフラワー登山は、9月22日(祝)に、南信州・吉田山で行われる予定。

その他行事として、ボランティア委員会メンバーと支援者登録の皆さんとの交流を兼ねた親睦山行を、9月3日、4日八ヶ岳・権現岳で実施した。

ボランティア委員会委員長　前田　隆久

【亀の会】

竜ヶ岳の遭難現場から学ぶ山行に行ってきました。『もう道に迷わない　道迷いを防ぐ登山技術』野村　仁著　(2015年山と渓谷社刊)を亀の会の会員から推薦図書として紹介されたのですが、「読むだけでなく、直接遭難現場に行って学んだほうが、より実感できる。」との声があがり、亀の会の月例山行として、6月23日(木)、23名の参加を得て鈴鹿山脈での遭難事故現場へ行くことにしました。

東海支部の前遭難対策委員長の野呂邦彦さんのお口添えで三重県山岳連盟の理事長の居村年男さんはじめ3名の方に竜ヶ岳の遭難現場を案内していただきました。

遭難現場での検証

当日は雨模様の天気でしたが、石榑峠から竜ヶ岳の表道の花崗岩の砂礫で滑りやすい斜面を登り、1時間弱で、道迷いの事故現場へ。居村さん等から事故現場で説明を受け、擬似体験し、素朴な質問をいろいろし、多くを学びました。

ケース１：　平成24年8月3日　道迷い遭難　64歳男性　単独行。竜ヶ岳からの下り、直進して登り返すべきところを、右斜面についていた水の流れる道を、ルートを外したことに気づかないまま降りてしまった。迷い込んだ後も、その先の砂石の溜まりが道らしきものと誤認し、また上り返すのを嫌い、そのまま下りて彷徨した。翌8月4日手首骨折　通りがかりの登山者が発見、車で搬送。

居村さんから、「どうして間違えたかを自ら考える」よう助言を受け、我々は、擬似体験すべく、一旦コースを登ってから下ってみる。傾斜がきついので、足元だけ見て下りがちになる。足元だけ見て下りて行くと、確かに「水みち」に自然誘導されてもおかしくないと思った。道を外れてからも更に下ると、前方に道と見まがうザレ場が見える。更に下りてみようとの誘惑にかられる。間違えた遭難者の心境が窺えた。

教訓：①ざら道の下りで足元不如意だと、足元だけを見て歩き、「水みち」を登山道と錯覚し下りかねない。特に下山時での登り返しに要注意。周りをよく見て歩こう。二人以上の場合は、前を歩く人の足の運びをなぞるだけ、おしゃべりしながら歩くだけで「周りをよく見て歩くこと」がなおざりになりがちになる。

②道迷いと判ったら、判るところまで戻るのが鉄則。

ケース2：平成28年5月3日　道迷い遭難、三重県在住50才男性　単独行。5/4無事保護、介助下山。登山道からそれて薮斜面を彷った挙句、翌日、登山道の傍で登山者に発見された。登山者が遭難者に呼びかけたところ、遭難者の「大丈夫一人で下山できる」の返答で、発見した登山者はそのまま登山を続ける。登山者が登山口まで下りて、遭難者がまだ下山していないことが判り、再捜索した。遭難者は登山者に出合ったことで安心したのか、道を外れたところで寝ているのを発見された。遭難すると強いストレスで、正常の思考力が働かなくなっていたようだ。

教訓：①遭難者が外観上異常が無く、本人から「大丈夫」との返事を得ても、遭難者（特に１晩明かした遭難者）は、正常の精神状態とは限らない。そのまま信じてはいけないと認識して対応する必要がある。特に男性の場合は骨折していても「大丈夫」という返事をしがち。歩かせてみると、ふらふらしていた。アンザイレンで下山。女性の場合は、しっかり歩けても「もう歩けない」と返事しがち。

参加者の感想

・地形図をよく見て歩くことの大切さを痛感した。

・足元ばかり見て歩く癖を改めたい。周囲の確認、道を確認しながら歩く。

・道迷いのところで初めて現在地を確認するという癖を直さなければいかんと思った。

単独山行については、今回の遭難は、何れも単独行による遭難ですが、居村さんは、自立した登山者になるために、単独行を勧めておられる。このことについても帰路意見交換しました。

・単独山行は出来るだけ避ける。単独で歩くときは、地形図が読めること、常に自分の居る位置を把握できることが肝要である。

・グループ山行のときに擬似単独行体験してみよう。

・メンバー全員が漫然と歩いていたり、ただリーダーについて行くという意識は止めよう。

なお、三重県山岳連盟理事長の居村さんから亀の会の熱心な姿勢を評価いただき、飛び入り参加された遭難対策委員長の山田明美さんからも「亀の会の皆さんは、楽しく元気な方ばかりでした。」との講評をいただきました。

亀の会　加藤守彦

【自然保護委員会】

2016年自然保護全国大会　牧野植物園

2016年7月16日と17日に自然保護全国大会が、高知県の県立牧野植物園、工石山等で開催され、17日のフィールドスタディは牧野植物園での観察会に参加した。

日本の植物分類学の父とされている牧野富太郎は、1862年高知県高岡郡に生まれ独学で植物の知識を身に着け、1884年には東京帝国大学理学部植物学教室に出入りするようになった。以降、精力的に研究発表を重ね1887年には日本で初めての新種のヤマトグサに学名をつけている。また、1889年に「日本植物誌図鑑」、1890年「大日本植物誌」などの刊行に携わった。

牧野富太郎翁の像

県立牧野植物園は、1958年牧野富太郎の業績を記念する建物として五台山に開園した。1999年、内藤 廣氏設計による「牧野富太郎記念館」がリニューアルオープンした。木がふんだんに使われていて木の温もりに浸りながら館内の展示を見ることができる。記念館の階段下は、貯水槽が作られていて植物への水やりに使われているとの事である。

また、2008年には50周年記念庭園、2010年は、温室もリニューアルした。園の面積は17.8ヘクタール、場所は高知市の五台山で、開園時間は9時から17時、休園日は年末年始（12月27日から元旦）。

牧野植物園観察組は、正門からの入場となり、ボランティアの案内人について園内を回った。まず、正門の通路の右手と左手の植物観察を行う。通路の右手は土佐の標高1000メートル以上の木本・草本が植栽され、左手は1000メートル以下の草本・木本が植栽されている。ハマエンドウ、コウボウムギなど印象に残っている。また、ウマノスズクサの花が満開であり、やはりサキソホンの形によく似ていた。

続いて連絡道になり、その壁に沿ってスエコザサが植えられていた。しばらく歩くと展望台があり植物園全体が見渡せ、川が流れているような景色であった。左手には高木が連なり、木々の上には、おそらく数十羽のアオサギがいて、コロニーになっていた。

バラ園には、様々な欄が競うように咲いていた。また、花の大きさや悪臭は世界一といわれるショクダイオオコンニャクが咲いていた。

牧野富太郎植物園では、雨水を床下に貯めてそれを利用していることやウマノスズクサの可憐な花を観賞できたことなどが特に印象に残っている。大会関係者に感謝申し上げたい。

自然保護委員　井藤恵美子

会　務　報　告

【2016 年 6 月常務委員会】

日時：6 月 22 日（水）19 時 00 分～21 時 00 分

１．支部長挨拶（高橋）

夏山フェスタでは 7,410 人の入場者を数えご協力を感謝する。青年部、ユースから若手が各委員会活動に関わることで人材育成を図りたい。財政困難の問題については皆さんの知恵を出しあい収益事業に取り組みたい。

２．審議事項

「山の日 8/11」のイベント(佐野)御在所で東海支部の主体で行うことし、7 月中旬までに小委員会で具体案を決め、支部全体の催しとする事が承認された。安全登山の PR 活動に「山の日」啓蒙活動をプラスさせる、と同時に登山の催しを組み合わせる方向で検討。

３．委員会報告

①会計(市川)：各委員会費用を渡した。費用削減に関して毛利総務委員長から電話回線を 1 回線にしては？との提案があり簡素化することとなった。

②岳連(市川)：6/21 開催された総会の報告。詳細はルーム内に掲示するとの事。

③支部友委員会(金谷)：配布された資料に基づき 5 月・6 月の山行実施状況、支部友ミーティングの予定、及び夏山フェスタにおける入会勧誘活動の成果につき報告。会員は現在 43 名。

④山行委員会(鈴木)：配布された資料に基づき月例山行の実施状況・6 月～7 月の山行申し込み状況などにつき報告。5 月の山行では虫(ヒル、ダニ等)の被害があったとの事。

⑤亀の会委員会(加藤)：「遭難現場から学ぶ」に 23 名参加予定。講師居村氏で明日 6/23 に行うとの報告。

⑥猿投の森づくりの会(小川)：配布された資料に基づき定例作業および 7 月の行事予定および夏季緑陰講座計画概要につき報告。高橋支部長より「支部員対象の作業日」を設け広く支部員の参加を呼び掛けては？との提案があった。

⑦図書委員会(石田)：本の配架の乱れがおきているとの報告。具体的な防止策を取る事が肝要ではとの意見あり。

⑧東海ユース(山田)：配布資料に基づき山行実施状況、7 月 20 日までの山行計画並びに夏山の計画を報告。現在会員は 27 名。

⑨支部編纂委員会(星)：No146 は総会の報告もあり 32 頁となり、活発な内容となった。7/1 に発送予定。

⑩青年部(藤嵜欠席)：報告事項特になし

⑪遭難対策委員会(山田)：5/21～6/19 の計画書提出状況は、メールで 38 件、電話は 20 件(近日連絡が多い)。メールでの登山届については個人山行か委員会山行か、わかり易い形での届け出が望ましいとのこと。

⑫登山教室委員会(委員長欠席の為、鈴木)：配布資料に基づき報告。現在中日は 15 名、朝日は 19 名。中日の土曜講座－10 月開講に向け募集を行う予定であるが、2017 年 4 月からの開校となりそうとのこと。

⑬自然保護委員会(南川)：配布資料に基づき自然保護全国集会、自然観察山行、HAT-J との清掃登山、猿投山観察・調査山行、森の勉強会などにつき報告。森の勉強会は 11 月に 20 回を迎え、一応今年度で終了予定である。

⑭ボランティア委員会(前田)：5/29 にブラインド山行「池田山」総勢 47 名で無事に終了、月例ブラインド山行「サンフラワー登山計画」(仮称)：支部員対象の山行第 1 回を尾高山で行う旨報告。

⑮技術向上委員会(片岡)：詳細は配布された資料参照。6/18 成瀬氏の講演には 40 名の参加を得た、7/2 に三浦氏の講演「山で役立つ知識と事故対応」を行う予定、PR は各委員会を通じて行うとのこと。

⑯写真展実行委員会(井上)：第 15 回東海岳人写真展決算報告。次回開催は 2018 年 3 月。

⑰デジタルメディア委員会(井上)：配布された資料に基づきメールによる情報発信システムの構築の準備状況報告。

⑱森の音楽祭委員会(箕浦)：10 月 22 日に開催される。6/24 に東海：西村先生と打合せをする旨報告。

出席者：高橋、山田、佐野、小川、尾上、石田、和田、片岡、前田、井上、加藤、市川、南川、箕浦、鈴木、星、毛利、金谷

【2016 年 7 月常務委員会】

日時：7 月 27 日（水）19 時 00 分～20 時 45 分

１．　支部長挨拶（高橋）

夏山シーズンにいよいよ入ってきた。昨日発生した障害者の殺人事件については共同声明が出た中で、山岳会としてもしっかり支援活動に取り組み社会貢献を果たしていきたい。報告

事項として6月25日、本部総会があり参加者105名。8月11日が山の日として山岳団体の取り組みの紹介や、海外支援登山も登山振興事業の中に位置付けられたとの事。他にインド・ヒマラヤや、決算報告がなされた。また準会員制度が発足した旨の報告があった。

２．　委員会報告

① 亀の会委員会(加藤)：配布資料に基づき委員会報告。6月23日の竜ヶ岳の山行は遭難現場から学ぶ事を体験してもらう計画を組んだ。またブラインド登山についての報告と、7月28日八ヶ岳白駒・8月25日の富士山麓の二子山登山の計画を発表した。

② 支部友委員会(尾上)：配布された資料に基づき委員会報告。登山教室委員会で検討してほしい事として、今年の夏山フェスタで東海支部に関心を示す人が120名いた。この人たちが参加できる枠組み作りを検討してもらいたいとのこと。

③ 山行委員会(鈴木)：配布された資料のなかで金時山の事故報告について発表した。6月25・26日の富士山登山の計画の中で、トレーニングで登った金時山で、下山の際、標高1150mで事故が発生した。岩の段差のある登山道で前のめりになって転倒をした。1.8mほど落下。額、頭頂部から出血。14針を縫う縫合手術をして一晩観察入院をした。防止対策としては参加者の情報をリーダーやグループ間で共有して、リーダーは参加者の実力を知って適切な判断を下すことも必要であった。

④ 猿投の森づくりの会(小川)：配布した資料に基づいて報告。7月2日に山桜フィールド炭焼き作業をした。前回ドラム缶で焼いた炭は灰になって失敗だった。再度木を詰めて炭焼きをして次回につないだ。7月12日定例作業は19名の参加で午前中は枯死木の除伐を行い、午後から第一回緑陰講座「上山路川を知る」として沢の遡行を行った。7月16日「第64回山路の森観察会」を15名の参加で草木の観察を行った。7月19日上の山路区で民有林整備を6名の参加で行った。7月23日の定例作業は15名の参加でコナラの枯損木の伐倒、道標調査を行った。午後からは第二回緑陰講座を森林土壌について行った。参加者15名。

⑤ 支部報編集委員会(星)：10月1日号について原稿締め切りは8月31日の予定。資料にそって報告。

⑥ 東海ユース(山田)：配布資料に基づき報告。定例山行は無い。夏山山行として7月29日～31日に唐松岳～白馬岳縦走。8月11日南信の高峰柳川の沢登りは2回目以上の人が対象。初めての人は8月下旬に予定の摺古木山テント泊を計画。8月19日～21日の北ア縦走を予定している。

⑦ 青年部(鎌倉)：配布資料に基づき山行報告並びに計画を報告。今後の活動として8月11日山の日に御在所でクライミングをして山頂でビラ配りを行う。9月17日～19日に小川山で合宿。学生連盟として9月24日25日に藤内小屋で定例会。10月にカナダのワディントン山行の報告会を行う。その際に御在所でロープ講習会も行う旨の報告があった。

⑧ 登山教室委員会(天野)：登山教室は教室自体がジリ貧になっているので立て直し活動中。中でも登山教室の指導員の強化を図ろうと準備中。新しく始まる登山教室については4教室程を行っていきたい。

⑨ 自然保護委員会(南川)：配布した資料に基づいて報告。第20回森の勉強会については11月5～6日に関西支部主催で開催。10月に支部報に掲載して参加者を募集する。8月11日山の日の啓蒙活動については、当委員会からは4名が参加。

⑩ ボランティア委員会(前田)：第15回ブラインド登山は8月1日福祉バスの抽選があり、それ以降に開催日を決定。候補としては多度山、美濃天王山。「第一回サンフラワー登山」は7月23日に実施。尾高山へ視覚障害者4名、支援者8名で実施。次回は9月22日に決定。「親と子のふれあい登山」に関しては10月15日、10月29日に予定、父兄説明会は9月20日に行うとの報告。2017年度SON愛知支援登山に関しては来年度の予定を決定。2017年4月22日(土)・23日(日)泊まり10組、日帰り5組くらいを予定とのこと。

⑪ 技術向上委員会(片岡)：6月沢登り講演会は成瀬氏による講演で成功。7月2日の三浦氏の講演も次回に繋げて啓蒙していく。次回講演会は11月19日に和田さんを招いて講演が決定。技術向上委員会としては9月に日山協主催の中高年安全登山研修会に派遣していく予定。

⑫ 海外登山委員会(高橋)：日中韓について、今回は日本で開催との事。東海支部参加東学連から3名参加する。また、10月に山田トシのワディントン山群遠征の報告会を開催予定とのこと。

⑬ 写真展実行委員会：特に報告なし。
⑭ デジタルメディア委員会(毛利)：8 月に委員会開催して 9 月にはメールによる情報発信の方向づけをするとのこと。
⑮ 遭難対策委員会(山田)：特にない。最近の登山届の提出状況は、メールでの届け出は 40 件そのうち委員会主催のものが 4 件、個人山行関係は 36 件。携帯電話での登山報告は 20 件。
⑯ 山の日のイベント(佐野)：三重県山岳連は三重県警からの依頼で「山の日のイベント活動」を長島のジャズドリームで行うこととなったので、御在所での山の日のイベントは東海支部のみで周知活動を行うこととなった旨報告。山の日啓蒙チラシに加え、安全登山のハンドブック等も配布の予定。20 名くらいでの周知活動を考えている旨報告があった。
⑰ 森の音楽祭実行委員会(毛利)：実行委員会議事録の配布資料により説明を行う。開催は 10 月 22 日に行う。その為の準備、事前作業に人員を出して欲しいと依頼があった。支部の行事なので各委員会から 2 名づつ出して頂きたいとのこと。
⑱ 総務委員会(毛利)：ルームキーの整理のため管理表作成の協力をお願いしたい旨の報告があった。
出席者：高橋、山田、佐野、片岡、尾上、中世古、和田、加藤、鈴木、小川、星、鎌倉、天野、南川、前田、箕浦、毛利、

【2016 年 8 月常務委員会】　休会でした。

総務委員会　毛利邦男　記

ルー ム 日 誌

━・━　6月　━・━・━・━・━・━

１日（水）青年部／TNCC(同好会)
２日（木）写真展委員会
３日（金）古道塩の道
６日（月）支部友委員会
７日（火）県岳連
９日（木）自然保護委員会
１３日（月）登山教室委員会
１４日（火）支部友ミーティング
１５日（水）山行委員会／総務委員会/副支部長会議
１６日（木）東海学生山岳連盟
２０日（月）読図会・図書委員会
２１日（火）ボランティア委員会
２２日（水）常務委員会
２３日（木）技術向上委員会
２４日（金）森の音楽祭実行委員会
２８日（火）猿投の森運営委員会

━・━　7月　━・━・━・━・━・━

１日（金）支部報発送・古道塩の道
２日（土）講演会(ファーストエイド)
４日（月）支部友委員会
５日（火）県岳連
６日（水）青年部／TNCC(同好会)
１１日（月）登山教室委員会
１４日（木）自然保護委員会
１９日（火）ボランティア委員会
２０日（水）山行委員会／総務委員会/正副支部長会議
２１日（木）東海学生山岳連盟
２５日（月）読図会・図書委員会
２６日（火）猿投の森運営委員会
２７日（水）支部報編集会議／常務委員会
２８日（木）技術向上委員会
２９日（金）亀の会

━・━　8月　━・━・━・━・━・━

１日（月）支部友委員会
２日（火）県岳連
３日（水）青年部／TNCC(同好会)
４日（木）写真展委員会
５日（金）古道塩の道
８日（月）登山教室委員会
９日（火）支部友ミーティング
１２日（金）自然保護委員会
１５日（月）読図会・図書委員会
１６日（火）ボランティア委員会
１７日（水）正副支部長会議
１８日（木）東海学生山岳連盟
２３日（火）猿投の森運営委員会
２４日（水）森の音楽祭実行委員会
３０日（金）支部報編集会議

会員異動

入会：滝清子（16008）　蜂谷昭子（16014）
猪飼明子(16021)　櫻井恵美子(16024)
栗本慎平（16038）　森あかり（16046）
三田村ウルズラ(16047)伊藤良信(16049)
退会：五十嵐安雄(13308)

総務委員会　毛利邦男

INFORMATION

【総務委員会からのお知らせ】

△東海支部新年懇親会のご案内△

日　時：平成29年1月21日（土）

場　所：ウイルあいち

名古屋市東区上竪杉町1番地

地下鉄「市役所」駅より東へ徒歩10分

名鉄瀬戸線「東大手」駅より徒歩8分

市バス「市政資料館南」より徒歩5分

会　費：　5000円程度(懇親会参加者のみ)

第1部　本年はNHKの山岳カメラマンとして活躍中の関　祐一氏の講演を予定しています。

第2部　懇親会　18時30分～20時00分

◎詳細は別途11月末ごろに往復はがきでご案内しますので出欠のご返事を下さい。

新年会には、支部友、青年部、東海学生山岳連盟、東海ユースの方々も参加できます。

△日本山岳会年次晩餐会のお知らせ△

本年度の年次晩餐会は12月3日（土）に東京新宿の京王プラザホテルにおいて行われます。会員の方には本部事務局から案内状が来ますので各自お申し込みください。

多数の方のご参加をお願いいたします。

総務委員長　毛利　邦男

【写真展実行委員会からのお知らせ】

下記のような写真撮影山行を企画しています。是非ご参加ください。

写真撮影山行と名付けていますが、景色を楽しむだけの参加でも OK です。

①　馬場島

・月　　日：10 月 30 日～31 日（1 泊 2 日）
・交通手段：公共交通機関
・宿　　泊：馬場島荘
・撮影対象：剣の大王杉、紅葉の剣岳
・申込締切：10 月 10 日
・担　　当：杉浦

②　上高地

・月　　日：12 月 29 日～30 日（1 泊 2 日）
希望者は 2 泊以上も相談可。
・交通手段：自家用車あるいはレンタカー
・宿　　泊：大正池ホテル
・撮影対象：大正池・上高地周辺、穂高連峰
・申込締切：12 月 10 日
・担　　当：箕浦

＊月日や行程などは参加希望者との相談で変更する場合があります。

＊参加希望、問い合わせは、山行担当または井上

090-6590-6669、hinoue@sb.starcat.ne.jp

あるいは写真展実行委員までご連絡ください。

写真展実行委員会　井上寛之

【インド･ヒマラヤ出版委員会からのお知らせ】

東海支部編集の「インド・ヒマラヤ」の正誤表を作成しています。昨年 12 月に出版後、読者の皆様から好意的な評価をいただきました。

今年 4 月からは正誤表の作成に取り掛かりました。7 月には執筆者の皆様に作成依頼を行い、現在最終のまとめを行っています。

10 月中には、ご購入いただきました方にお送りします。月末までに届いていない場合はご一報ください。

連絡先：　副編集長　星 一男宛

E-mail　khoshi@katch.ne.jp

電話　0566-77-0765

「インド・ヒマラヤ」編集委員長　沖 允人

編集後記

2020年に日本で開催されるオリンピック種目にクライミング競技が加わった。東海支部に隣接するクライミングジムも、ますます盛況のようである。また、愛知県下の高校登山部では、部員は増加傾向にあるという。

だが、引率する教員の数は限られており、競技や日常活動について、懸念の声が聞こえてくる。今一度、広い視点で「登山」を考える必要がありそうだ。

星　一男

海外トレッキングのパイオニア！

世界の山旅を手がけて47年

アルパインツアーサービス株式会社

“山仲間でオリジナルツアーを企画しませんか？”
説明会にお伺いします。お気軽にご相談下さい

名古屋 〒450-0002 名古屋市中村区名駅3-23-2（第3千福ビル3階） 052-581-3211 アルパインツアー 検索 www.alpine-tour.com

ATLAS TREK

ハイキングから本格的な高峰登山までお気軽にお問い合わせ下さい。
観光庁長官登録旅行業第 1167 号 /（社）日本旅行業協会正会員

株式会社アトラストレック
名古屋サービスデスク TEL:052-788-2422
（東京本社転送電話）
【東京本社】〒180-0008 東京都新宿区三栄町 25 番地　三栄ハウス 202
TEL:03-3341-0030 FAX:03-3341-9200 E-Mail:info@atlastrek.co.jp
ホームページ　http://www.atlastrek.co.jp/

SINCE 1975
mont·bell

ウエア・ギアに
遊び心もそろえて
お待ちしています！

アウトドア用品は、
機能的なアイテムが豊富にそろう
「モンベルストア」へ。

名古屋店 Outlet	愛知県名古屋市中区栄3-18-1 ナディアパークロフト 6階
長久手店 Outlet	愛知県長久手市片平1-901
名古屋みなと店 Outlet	愛知県名古屋市港区品川町2-1-6 イオンモール名古屋みなと 3階
各務原店	岐阜県各務原市那加萱場町3-8 イオンモール各務原 2階
長島店 Outlet	三重県桑名市長島町浦安368 三井アウトレットパークジャズドリーム長島 2階
鈴鹿店	三重県鈴鹿市庄野羽山4-1-2 イオンモール鈴鹿 1階
新静岡店	静岡県静岡市葵区鷹匠1丁目1-1 新静岡セノバ 4階

Outlet アイコンのある店舗では、アウトレット商品も取り扱っています。

モンベル・カスタマー・サービス
0088-22-0031/TEL.06-6536-5740　www.montbell.jp
※フリーコールは携帯・IP電話からはご利用いただけません。

企 画・デザイン・印 刷

株式会社 ASAI 隆文社

株式会社　浅井隆文社
〒453-0801 名古屋市中村区太閤四丁目8番3号
TEL (052) 451-6656　FAX (052) 451-6657
E-mail : ta@asai-rbs.co.jp

♣♣♣♣♣♣♣ OMC ♣♣♣♣♣♣♣

住いのコンサルタント

㈲ 富 士 見 企 画

〒460－0014
名古屋市中区富士見町８番８号

♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣

建設業許可を取りたい、日本国籍を取得したい（帰化）、遺言を公正証書で作成したい、戸籍謄本や除籍謄本を代行取得して欲しい、任意成年後見の相談をしたい、会計記帳を頼みたい等々

ご相談は行政書士の西山秀夫へ

〒460-0002名古屋市中区丸の内3丁目21番21号
（地下鉄・久屋大通駅から2分の）丸の内東桜ビル1004号室
TEL:090-4857-9130
URL: http://www.nygs-office.com/

㈱ワークシステムサービス

一般社団法人　日本自動車運行管理協会
一般社団法人　中部地区自動車管理業協会

・一般貸切旅客事業　・車両運行管理事業
・愛知県知事登録旅行業　・労働者派遣業
・ビル清掃管理事業　・介護支援事業

〒465-0021　名古屋市名東区猪子石３丁目113番地
TEL 052 (779) 8777㈹　FAX 052 (779) 0031
http://www.work-system.co.jp/